

書評

『日本語教育の課題—ICU日本語教育四十周年記念論集』

西原 鈴子

論集の概要

本書は、国際基督教大学が日本語教育開始40周年を記念して行った2つの行事（記念研究会と論集の刊行）の一方の成果である。大学の日本語教育プログラムと日本語教育研究センターの共同企画によって、専任、非常勤を含めて16名の教職員による論文が掲載されている。全体は4章で構成されており、はじめに日本語教育の理論、続いて、日本語教育の教授法、日本語教育の4技能、外国における日本語教育となっている。それぞれの章に4、4、5、3の論文が含まれている。以下に各論文の内容を紹介するとともに、若干の感想を申し述べてみたい。

1 日本語教育の理論

第I章は理論編である。この場合の「理論」の意味するところは、哲学的・演繹的であるよりは、むしろ教育実践の場における新しい動向がどのような理論的背景を持つのかを、帰納的に捉えた論考と考えるべきである。

この章の冒頭論文は、飛田良文氏の「異文化接触の視点から見た日本語教育学の体系」である。日本語教育が研究分野として確立して行く必要性を説くとともに、研究の中心となるべき視点を紹介している。日本語教育の「学」としての独自性が未開発であるとの指摘は、関係者の反省と、いっそうの努力を促すものであろう。

志賀幹郎氏の論文「第二言語教育としての日本語教育とバイリンガリズム」は、日本国内に在住する日本語非母語話者の増加とともに問題となって来た、文化的・言語的共生のための方向をさぐる論考である。第二言語教育としての日本語教育が、一方的な日本語単一言語化の方向ではなく、新来者の第一言語をも活性化させる、多言語・多文化を奨励する方向に向かわなければならないとしつつも、共生のために第一言語・第二言語のみを可能性として考えるだけでなく、第三の次元としてクレオール化をも視野に入れるべきであるとの見解を示している。

続く村野良子氏の「高校留学生のための日本語教育—学習内容、学習過程、学習の支援の方法—」では、学術活動を前提として来日する大学留学生とは異なった、日本の家庭に住み日本の学校に通学する高校留学生達が、一方方向の異文化同化ではなく、異文化理解

を達成するための日本語教育のあり方を、留学生活の過程で使用可能な具体的な教材例を提示しつつ論じている。

この章の最後は鈴木庸子氏の「コンピュータを利用した日本語教育の研究動向」である。近年、新しい教育メディアとして注目を集めている分野について、先行研究を分類・紹介し、観点ごとに現状と展望をまとめている。CAIなどのソフト面の開発研究だけでなく、少数ながら存在する、直接の教育活動への応用を目指した実践的研究にも言及している。コンピュータがどの程度学習の支援に効果を表すかについての科学研究が必要であることも指摘されている。

II 日本語教育の教授法

第II章では、教室活動において問題となる構文要素について5つの論文が掲載されている。学習者向けの具体的な説明というよりも、構文分析の試論が展開されている。最初の広瀬正宜氏の「日本語教育における文法用語について」は、日本語教育の現場で使われる文法用語がまちまちであることによる学習者の混乱を指摘し、特に用言の文法用語について教材それぞれの用語の理論的背景を分析しつつ統一のための提案をしている。

根津真知子氏の「待遇表現の観点からみた授受表現の「依頼」と「申し出」」は、語用論的視点から先行研究を再評価し、Brown/Levinsonの提案した枠組みに沿ってFaceとそれを維持するためのストラテジーという2つの方向から分析を試みている。

平田泉氏の「授動詞文の基本構造—外国語としての日本語の視点から—」では、授動詞「やる／あげる／くれる」の運用における与格動詞「に」の振る舞いについての説明を既存の教科書から引用し、それらを解釈するための基本構文の仮説に修正を加える提案をしている。

田中真理氏の「第二言語習得における複文生成」は、学習者の発達・習得段階であらわれる中間言語的複文を分析し、学習者による複文生成が、まず単文を並列させ、第二段階として調整して複文を作るに至るというプロセスを踏むと仮定して、その構造を説明している。

III 日本語教育の四技能

第III章では、学習者の日本語能力の問題を中心に据え、具体的技能としての読解・聴解教育、能力獲得のストラテジー、および能力の評価の問題が論じられている。中村妙子氏の「日本語教育における読解について」は、読解能力のレベルをどう定義するかの問題と、読解教材の現状を踏まえて、日本語学習者の大学教育の課程における読解能力育成の課題

を論じている。

小川貴士氏の「書き下ろし読解教材一考」は、特に中級前期レベルにおいて生教材への橋渡しとして使用される書き下ろし教材が、言語学習の段階への配慮に傾きすぎて、テキストの視点等、本来読解を通して学習されるべき要因をおろそかにしていると批判し、それらの要因がこのレベルにおいても重視されるべきであるとの見解を示している。

池田伸子氏の「日本語予備教育機関における中・上級授業デザインについて—教師・学生へのアンケート調査をもとにして—」は、予備教育機関での教師・学生へのアンケート結果において、教師側と学生側の意識のズレが認められることから、教師の思いこみを排除し、学生の意識を取り入れ、学生のストラテジー育成を考慮に入れた柔軟性のある授業設計が必要であると提案している。

横須賀柳子氏の「日本語の語彙における学習ストラテジー」は、モナッシュ大学の日本語学習者を対象とした調査結果をもとに、語彙の学習に関する学習者の直接・間接ストラテジーを分類し、成績上位者と下位者間のストラテジー使用の差を分析している。

山下早代子氏の「プレースメントテストからみたレベル別日本語能力」は、国際基督教大学の日本語教育（JLP）における2種類のプレースメントテストの結果を資料として、大学内で日本語を継続学習してきた学生の方が新入学生よりも低いレベルに判定される傾向があること、同レベルの学生間にレベル判定差がみられること、などの問題点をもとに、テストのあり方そのものを論じ、カリキュラム見直しへの提言としている。

IV 外国における日本語教育

最終章にはイスラエル・オーストラリア・ロシアの3カ国における言語教育および日本語教育の事情を解説した3論文が含まれている。それぞれの地域は特有の言語事情を持っており、日本語教育を広く考えるための参考資料となっている。

中村一郎氏の「ウルパン—多様性の中でのヘブライ語教育—」は、イスラエルにおいて宗教語としてのみ機能していたヘブライ語の、奇跡的とも言える現代語としての復活の経緯と、そのために果たした集中的言語文化教育機関としてのウルパンの役割が論じられている。

カッケンブッシュ寛子氏の「オーストラリアの言語政策と日本語教育」は、オーストラリアの国家政策としての外国語教育の展開、とくに東アジア言語の重視と日本語教育の発展を言語政策の視点から歴史的に解説し、LOTEの一部としての日本語教育の実施状況を紹介している。

最後に稲垣滋子氏の「日本語の表記法に対する態度と文章理解力—ロシア語圏での調査

からー」は、ロシアにおいて習得されている日本語が「堅い」表現・表記を特徴とすることから、それがロシアにおける読み書き重視の日本語教育に由来するものと判断し、ロシア語母語話者に対して日本語の理解を助ける表記に関する調査を行った結果を記述している。学習者達が、文章理解のためには、ロシア文字で表音化されている文章よりも、漢字仮名交じりの方がよいと考えているという結果が報告されている。

本書の特色

以上に紹介した16論文によって構成されているこの書は、いくつかの点で特筆されるべきであると考えられる。まず編集に関しては、非常勤教員にも執筆の機会が与えられていることが挙げられる。一般的に大学における日本語教育が少数の専任教師と多数の非常勤教師によって担われている現状では、非常勤の教員が教育に占める役割は非常に大きい。しかし、研究発表の場を公平に与えられることはまだ少ないというのも現実である。その点で、この書が常勤・非常勤の区別を廃した編集方針を採ったことは、日本語教育への貢献をフェアに認めた選択であった。

第二に特徴的なのは、研究領域の広がりである。第一章の志賀、村野両氏の論文は、大学入学以前の年齢層の日本語学習者に関する論考である。また、第四章の中村、カッケンブッシュ、稲垣諸氏の論文は、日本語教育の海外への地域的広がり、および言語政策への関心から生まれたものであろう。第一章の鈴木氏、第三章の横須賀氏の論文は教室での教師による指導という伝統的教育概念を越えて、学習者の自律的学習に注目している。このように直接教育の対象とする学習者の範囲を越えた多様な研究への関心は、第一章で飛田氏が指摘している日本語教育の研究領域としての発展、および国際基督教大学の日本語教育の発展をより豊かに、柔軟なものにさせるものであることを期待させる。

もう一つの重要な特徴は、第二章の諸論文、および第三章の中村、小川、池田、山下諸氏の論文が、日常的な教育の現場の課題を基盤にして、単に抽象的概念設定を提起するにとどまらず、具体的な教育活動への指針を提示していることである。それぞれの論文が、現在言語教育の分野で盛んに議論されている、教員が教育活動の現場から発想し、現場の改善を目指すアクション・リサーチの例ともなるものとなっている。教師による研究は、まず第一に学習者の学習の向上につながることを望ましい。またそれによって教師自身が職業的に成長できるものであることが必要である。これらの論文はその条件を十分満たしているものである。

次なる世紀に向けての希望

以上に述べたように、本書には16の優れた研究論文が収められている。国際基督教大学の日本語教育の四十年の歴史の中で研鑽が積み重ねられ、発展してきた成果として、深く敬意を表するものである。最後に、研究のさらなる飛躍のために、若干の希望を申し述べたい。

第Ⅲ章の論文中で横須賀氏が述べているように、日本語教育界の研究の関心は、教師は何を教えるかという日本語教育の内容に関する問いから、どのように教えるかという教授法に関する問いへ、さらに、学習者がどのように学ぶかという学習課程に関する問いへと展開してきている。研究領域も、日本語そのものの構造・運用研究から、教育方法論へ、さらに学習過程研究へと拡大してきている。認知科学あるいは教育関係の研究分野の進展と呼応して、「教育」のあり方も、トップダウンの知識伝授型から、体験重視の帰納的学習重視型へと広がってきている。そのような流れの中で、学習者の文化的・認知的属性に関する研究や、学習者の学習スタイルに関する研究、学習環境に関する研究、あるいは教師・学習者の関係に関する研究が重要性を増しつつある。そのような研究動向は、特に教育現場に密接に関わっている教師達に、新たな研究の機会を与えている。教室から出発して教室に戻る実践的な研究が奨励されるわけである。

国際基督教大学の日本語教育は、多くの革新的な教育実践で日本語教育界のリーダーシップをとってきている。それはとりもなおさず、教育活動のハードスケジュールにめげることなく実践に励む教師集団の努力の賜であることは言うまでもない。現場を知る者の一人として、教師一人一人がハードスケジュールに埋没することなく、「考える教師」としてアクション・リサーチに取り組んで行く機会を獲得できるよう、心から希望するものである。現場の語学教師だけができる研究の領域がたしかに存在すること、そしてそれが、日本語教育を活性化する源泉となることを確信し、その発展を心から希望するものである。